

企業と
地域が つながるとき

第6回

社員に “ボランティア体験” の機会を提供する

イー・アクセス株式会社の「夏ボラ」レポート



東京港野鳥公園の干潟のクリーンアップを行う。
社員の家族も参加した。

2012年1月、電気通信事業者のイー・アクセス株式会社広報・CSR室の社会貢献プログラム担当者の方が東京ボランティア・市民活動センターにいらっしゃいました。これまで同社は、清掃活動や団体献血といった身近な社会貢献活動に取組まれていて、来年度から「社員満足度の向上と社会貢献の両立」を目標に掲げ、全社員が何らかの社会貢献活動に参加できるような環境を整備・支援したいと考えているというご相談でした。

センターに置いてある昨年の夏の体験ボランティア・キャンペーンの活動先一覧をお見せすると、活動メニュー数の多さにどこから取り掛かったら良いのか悩まれてしまったので、まずは社会貢献活動に関する社員の意識調査を目的としたアンケートを行うことをご提案しました。アンケートには200件以上の回答が集まり、「視野を広げたい」「自分の成長につなげたい」という声や、社員の皆さんの多様な関心を読み取ることができ、プログラムを組み立てて行く上でとても貴重な資料となりました。

その中でも関心の高かった福祉・環境・国際協力・児童・被災者支援のテーマを組み合わせ、NPOや地域のボランティアセンターと協働して、6つのプログラムを組み立てていくことにしました。そして社員の皆さんが活動に親しみを持ってくれるように、また今後、夏はボランティアの季節と意識づけができるようにという想いをこめて、「イー・アクセス社会貢献推進プログラム 夏ボラ」と名付けて、インターネットやポスターでボランティアを募集して

いきました。

「夏ボラ」の特徴のひとつとして挙げられるのが、「集合型」と「個人型」の2つの参加方法を用意したこと。 「集合型」はアフターファイブやランチタイム、週末に複数の参加者が集まって、NPO講師からの説明を受けた上で活動するスタイルであるのに対し、「個人型」は会社の休み時間や自宅において個人で自由に活動できるものです。「個人型」は育児中の社員や全国の支店の社員など、時間や場所に制約のある社員の参加を可能にしました。「個人型」の参加者に対して活動の意義が伝わるように、「集合型」で行ったオリエンテーションの動画をインターネットにアップしました。

それでは、6つのプログラムの詳細をご紹介します。

① チームになって、
アフターファイブのボランティア
スマートフォンを活用した
バリアフリー・マップ作り

夏ボラ第一弾として、NPO法人Check of the「スマートフォンを使った社会貢献活動」というプログラムを実施しました。このプログラムは車いす利用者や、子連れのお母さん・お父さんが外出先で困らないよう、多機能トイレの場所やその設備をチェックし、スマートフォンを使ってインターネット上のサイト「Check A Toilet」にトイレの情報を登録していく活動です。「集合型」は忙しい社員も参加しやすいよ



本社会議室でバードコールのおもちゃキットを作成。被災地の子どもたちに寄贈した。

うアフターファイブの時間帯に実施し、会場をイー・アクセス本社の会議室としました。最初に活動の目的とチェックするポイント（オムツ替えシートは設置されているのか、手すりや稼働式なのか、ドアは電動式なのかスライド式なのか等）についてNPOの講師から説明を受けました。既に情報が登録されているトイレについても、いろいろな人の視点でアップデートしていくことで、より良い情報にしていく必要があるそうです。

続いて、トイレの情報を登録するためのアプリの使い方を確認し、NPOの学生ボランティア

アを含む3〜5人のチームに分かれて、CSR室が事前に用意した本社周辺の多機能トイレ地図に従って、実際に現地を歩いて回りました。活動終了後に会議室に戻ってきた参加者からは「トイレの場所が分かりにくく、車イスだったら簡単にたどりつけないと思った」「参加しないと得られない気付きが多く、他の活動にも参加してみたいと思った」という感想が寄せられました。全国各地の社員が、自宅近辺や旅行先で行った「個人型」と「集合型」の活動を併せて、2か月間で109件の情報が登録されました。多くの社員が参加し、良い反応が得られたことで、その後の「夏ボラ」もきつと成功するという兆しを感じ取ることができました。

②被災地へ思いを込めて、

全国各地の社員も大活躍

「間伐材を利用した

おもちゃキット作り」

プログラム第二弾は「環境保護」「被災者支援」をテーマに、NPO法人樹木・環境ネットワーク協会の協力を得て、森林保全活動で生まれる間伐材を用いたバードコールのおもちゃキットを作成しました。バードコールは木片に開けた穴に差し込んだネジを回すことで、キョッキョと鳥のさえずりのような音を出すもので、野山でこの音を鳴らすと鳥が集まってくると言われてます。イー・アクセス社は前年、東日本大震災被災地のボランティアに参加していたこともあり、社内で被災地への継続支

援を望む声が多く挙がっていました。そのため、作成したキットは震災によって遊ぶ場所や機会が奪われた被災地の子どもたちへ贈ることになりました。

「集合型」の会場である本社会議室で、NPOの講師より森づくりにおける間伐の必要性についてお話があった後、実際にキットの作成に移りました。参加者はまず、鳥とどんぐりの形に切り出された色や硬さの異なる3種類の木片の中から好きなものを選びます。そして、約1時間かけてナイフで形を整え、やすりで全体を磨いてキットを完成させました。「作業に集中でき、良い気分転換になった」という声も聞かれました。

一方、全国の拠点から「個人型」への参加も多く、最終的には55名の参加者が94個のキットを完成させました。想いを込めて完成させたキットは、ネジ、首から掛けるための紐、説明書とともに、被災地での活動を続ける「おもちゃの図書館全国連絡会」を通じて、宮城県南三陸町の子どもたちへ届けられました。復興市や福祉まつりといったイベントで子どもたちはパーツを組み合わせて色を塗ったり絵を描いたりした後、バードコールの音を鳴らして楽しんでます。

③ランチタイムにボランティア

「布チョッキンで

カンボジアの子ども支援」

続いて、国際協力の分野ではカンボジアの支

援を行っている認定NPO法人幼い難民を考える会（CYR）の「みんなで布チョッキン」というプログラムを実施しました。活動内容は各自が持ち寄った古着やハギレを、人形やボールの型紙に沿ってカットしていくというものです

が、そのシンプルな活動には巧みな支援の仕掛けがあります。カットした布は現地で使う糸や綿の代金、運搬費に充てるための募金と一緒にカンボジアへ送られ、現地の女性たちが縫いあわせてボールや人形を完成させます。日本から既製品を持ち込まずに現地で作成することで、女性たちに仕事の機会を提供することができず。出来上がった人形やボールは、遊び方の研修を受けた現地の先生たちに渡され、子どもたちの保育に役立てられます。参加者はNPOの説明を聞きながら、女性たちに労働の機会を提供するという活動の目的に共感するとともに、内戦から30年以上経った今もなお、子どもたちに遊具が行き渡っていないというカンボジアの状況に驚いていました。

本活動は早く帰宅しなければならぬ育児中の女性社員も参加しやすいよう、全3回の活動日の内、2回をランチタイムに本社会議室で行いました。ランチタイムは時間が限られているので、比較的簡単なボールのパーツを作成し、時間がかかる人形のパーツはアフターファイブに作成しました。テーブルごとにチームで作業することで、普段交流する機会の少ない社員同士のコミュニケーションの場にもなったようです。全国の支店からの個人参加も多く、東北支店の参加者からは「震災の際、多くの方より支

援をいただいで、そのお返しをできたことがよかった」という感想が上がってきました。

④週末は家族でボランティア 〜野鳥公園の環境保全活動〜

9月の週末、NPO法人東京港グリーンボランティアの協力で、大田区にある東京港野鳥公園の干潟のクリーンアップを行いました。1960年代後半の埋め立て地に作られたこの公園には雨水が溜まってできた池や原っぱがあり、自然と数多くの野鳥たちが集まってくるようになりました。ところが、そうして出来た干潟にはペットボトルやビニールなど様々なゴミが流れ着き、生態系に悪影響を及ぼしているため、NPOが定期的に清掃を行っています。

このプログラムは「夏ボラ」で初めての野外活動でした。野外活動は天気は左右されますが、この日は参加者の集合時間一時間前から突然の豪雨となってしまいました。本日に活動できるのか不安に思っている中、参加者全員が集合しました。幸いにも活動についてのレクチャーを受けている最中に雨も上がり、夏色一色の天気の中で活動を行うことができました。参加者の中には野鳥好きの方がいたり、夏休みに行った水族館で、ゴミを食べて死んでしまったイルカの話聞いた親子など、様々な理由から清掃活動に参加していました。社員とその家族以外に外国人ボランティアも加わって、40袋ものゴミを回収しました。午後はNPOのガイドの下、園内の野鳥やカニなどの生態系を観察し、再現

された里山や田んぼを見学しました。

⑤子どもも大人も スポーツでリフレッシュ 〜外国にルーツのある子どもたちとの スポーツ交流会〜

認定NPO法人多文化共生センター東京は親の都合で日本に移住してきた日本語を母国語としていない子どもたちが通うフリースクールとして、義務教育の対象ではない15歳以上の子どもたちが高校受験に向けて日本語を習得する場を提供しています。母国では有能な子どもも、日本語が分からないために高等教育を受けることができず、将来的に希望する職に就くことができなくなってしまう連鎖に陥ってしまうケースが多々起こっています。今回はそうした実情を学び、子どもたちが日本語や日本の文化に親しむ機会になればと、スポーツを通して交流を図りました。

多文化共生センターの校庭で行ったドッチボールは、ルールを知らなかった子どもたちも少しずつ実践で理解しながら、必死で逃げたりボールを当てたりと大盛り上がりでした。教室で行った卓球は、社員と子どもたちの混合チームのトーナメント戦で白熱しました。これから日本で大人になっていく子どもたちにとって、日本の社会人と実際に交流することは貴重な経験になります。日本語がまだあまり話せない子どもたちと、どんな話をしたらいいのか緊張してしまう社員もいるのではと心配していました

が、一旦スポーツ大会が始まると大いに盛り上がり、久しぶりに思い切り汗を流して、良い気分転換ができた社員も多かったのではないのでしょうか。

スポーツ大会終了後は、希望者のみ毎週土曜日に実施されている学習ボランティアに参加しました。先生役の社員が子どもたちに数学や国語を教えることで、さらなる交流を図ることができました。

⑥ 食へたり歌ったり、 秋空の下でボランティア ～震災による都内避難者の方々と BBQ大会～

10月に入り「夏ボラ」のファイナルとして、荒川ボランティアセンターの協力で、東北からの避難者の方々とBBQ交流会を足立区の公園で開催しました。荒川ボランティアセンターは荒川区に避難している方々と2011年9月から計7回の交流会を行っており、第8回目の今回は、イー・アクセス社員も一緒に参加して楽しむということになりました。

避難者の中には一方的に支援を受けてばかりいることを心苦しく思っている方もいるというので、今回は避難者の皆さんにも活躍していただきました。避難者の皆さんの人柄や特技まで把握されている荒川ボランティアセンターの担当者から「Aさんはハーモニカが得意だから披露してもらおう」とあるいは「挨拶はBさんにお願いしよう」と提案していただきました。

避難者の方々の心情を思うと、どのように接したらよいか分らないと言っていた社員も、避難者が到着するまでの準備を行っているうちに緊張がほぐれた様子でした。BBQが一段落すると、ハーモニカの演奏に合わせて全員で「ふるさと」を合唱したり、手話付きで「幸せなら手をたたこう」を歌ったり、気持ちの良い秋空の下、赤ちゃんから高年齢の方まで、みんなでテーブルを囲んで楽しく歓談しました。ボランティアは決して堅苦しいものではなく、この交流会のように気軽に集まって、楽しい時間を過ごすだけでも、大きな意味があることを改めて実感しました。

「ボランティアって大変そう」、「仕事が忙しくて時間がない」といった事前アンケートの結果を踏まえ、今回のプログラムの企画・運営に携わったイー・アクセスCSR担当者の皆さんは、各NPOへ何度も足を運んで打ち合わせをし、メールや電話での連絡を重ねて、丁寧に準備を進めてきました。その努力の結果、前述のとおり全てのプログラムが無事大成功に終わり、当初目標としていた150名を超え、全社員の13%にあたる178名が参加しました。また、ボランティアに関心を持って2回以上参加してくれた方がいたことも非常に嬉しいことでした。社員だけでなく、その家族や友人も一緒に参加したケースも多く、今回の活動が家族や友人と交流を深められるチャンスにもなったようです。

CSR室はプログラム終了後、参加者のアン



都内避難者の方々とBBQで交流を図った。

ケート結果を分析して、活動を振り返りました。「集合型」「個人型」ともに満足度が高く、参加者の8割が次回も同じプログラムに参加する意思があることが分かりました。様々な社会課題に気づかされた方も多かったです。CSR担当者も社員の方々も今回の活動を通して多くの気づきを得ることができ、本センターがそのお手伝いのできたことを大変嬉しく思います。

若林明子

(東京ボランティア・市民活動センター)